International
Paralympic Committee

IPC ATHLETICS

IPC Athletics競技規則解説

IPC Athletics STCメンバー
一般社団法人日本パラ陸上競技連盟
理事・競技運営委員長 関 幸生

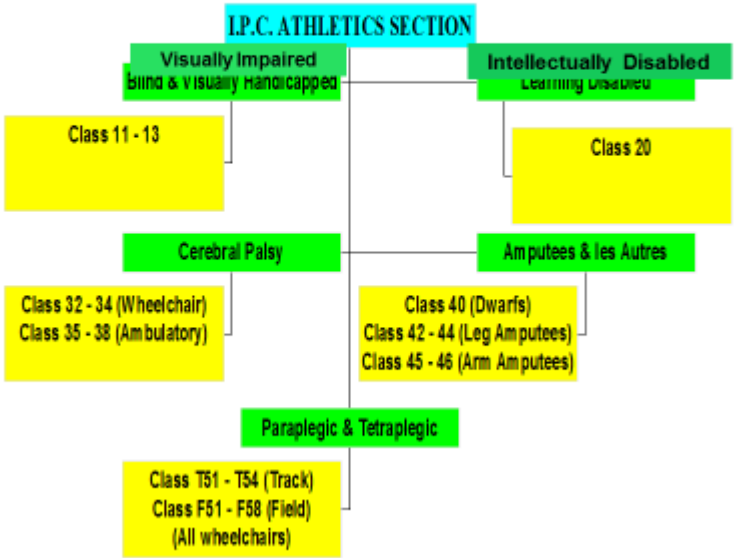
なぜ特別なルールがあるのでしょう？

IPC ATHLETICS

有利にするためではなく
できないことを可能にするためなのです。

クラス分け

IPC ATHLETICS



IPC ATHLETICS

クラス分け

障がいには、さまざまな種類や程度があります。それらが競技結果に影響しないよう同程度の障がいで競技グループを形成することを**「クラス分け／Classification」**と呼んでいます。

競技種類

走競技・跳躍競技のクラスを意味する「T」、投てき競技のクラスを意味する「F」があります。

T／Track：走競技（100m～マラソン）,跳躍競技（走幅跳,走高跳,三段跳）

F／Field：投てき競技（砲丸投、円盤投、やり投、こん棒投）

IPC ATHLETICS

クラス分け

障がいの種類

選手の主たる障がいの種類や競技形式を示しています。

10番台：視覚に障がいのある立位競技者

20番台：知的に障がいのある立位競技者

30番台：痙性麻痺、筋強直、協調運動障がいなどの特徴を示す脳原性の麻痺のある立位競技者（35～38）及車椅子や投てき台を使用する競技者（31～34）

40番台：低身長、脚長差、切断、関節可動域制限、筋力低下等の障がいのある立位競技者

50番台：脚長差、切断、関節可動域制限、筋力低下等の障がいのある車椅子や投てき台を使用する競技者

60番台：聴覚に障がいのある立位競技者（国際大会では参加資格はない）

IPC ATHLETICS

クラス分け

障がいの程度

障がいの程度に応じて0～9の番号が割り当てられています。

基本的に番号が小さいほど障がいの程度は重くなります。

IPC ATHLETICS

IPC公認大会と公認記録

IAAFとIPCとでは、記録の公認のシステムが大きく異なります。

オリンピック出場のための標準記録突破には
日本陸連公認大会での公認記録を使うことができます。
IAAFの世界記録、アジア陸連(AAA)のアジア記録も
条件を満たせば、日本陸連公認大会での記録が認められます。

パラリンピック出場のための標準記録突破には
IPC公認大会での記録しか認められません。
IPCの世界記録とアジア記録は、
IPC公認大会での記録しか認められません。

IPC ATHLETICS

IAAF規則と日本陸連競技規則
IPC Athletics規則

日本陸連公認大会(国内でのIAAF公認大会を除く)では
日本陸連競技規則が適用されます。
日本国内でのIAAF公認大会（ゴールデングランプリやIAAFラベルロードレース）では、IAAF規則（ルールブックの【国際】）が適用されます。

IPC公認大会では、IPC Athletics規則が適用されます。
IPC独特のルール以外は、IAAF規則と同じ内容です。
IPC公認大会には、IPCから技術代表が任命され、競技運営の最終決定権を持ちます。

日本陸連競技規則の【国内】でなく【国際】の再確認が必要です。

IPC ATHLETICS

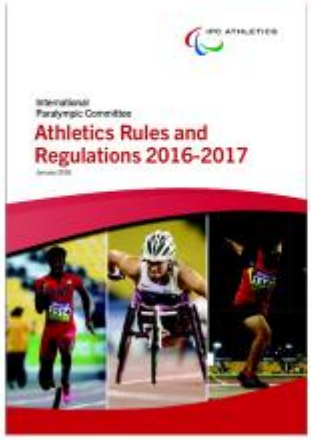
IPC世界記録とアジア記録

IAAF規則の世界記録(第260条)と大部分が一緒です。
- 非機械式(超音波)風速計
- スタート・インフォメーション・システム(スタブロが必要な種目のみ)
- 投てき物の再検査　　など

例外として
- 競技場は、IAAFクラス認定でなく、日本陸連公認でOK
- ドーピング検査は、競技会内で実施していれば、当該選手の検査は不要
- 個人種目、リレー種目ともに1名/1チームでの競技でもOK

IPC ATHLETICS

IPC Athletics競技規則



トラック競技

IPC ATHLETICS

視覚障害を持つ競技者のための種目

クラス 11 は完全に視力がなく、特別なルールがあります

クラス 12 は一部視力がありますが、特別なルールが認められています

クラス 13 もまた一部視力がありますが、すべてIAAFルールを適用します

競技者によっては、複数の障害があること理解しておくことが重要です
– 例えば、聴覚障害と視覚障害の双方がある競技者もいます

こうした競技者へは特別な対応がなされます

視覚障害（11~12）

IPC ATHLETICS

不透明な眼鏡またはアイマスク:

トラック種目では、クラス11の競技者は事前に承認を受けた「完全に光を遮断する」眼鏡やアイマスクを着用しなくてはなりません
「完全に光を遮断する」かの確認は、招集所で競技者係がおこないます。さらに招集所では、予備の眼鏡を持ち込むことのないよう持ち物検査も必要です
スタート地点でも、必要があれば、出発係が眼鏡やアイマスクの再確認をおこないます。競技者がスタートの際、確実に着用しているかの確認も重要です。
着用せずにスタートした競技者は、失格となりますので、監察員も十分に注意してください。
クラス12は着用の義務はありませんので、一緒にスタートするレースでは、混同しないよう注意が必要です。

視覚障害(11~12)

IPC ATHLETICS

ガイドランナー:

すべてのトラック種目でT11の競技者はガイドランナーが必要です。T12は任意です。

ガイドは、認識できるよう明瞭な色彩のビブ（ベスト）を着用しなくてはなりません。招集所で渡されます。

T12も含めガイドと走る際には、1m以下のガイドロープ等を使用用しなくてはなりません。ロープ等の確認は招集所でおこないます

ロープは、手か腕でつながれなくてはなりません。スタート前には出発係、レース中には監察員による確認が必要です。

フィニッシュ手前、10mから先では、ロープ等を離すことが認められています。10m地点を示すコーン等をトラック両脇に置きます。(4x400mリレーのテイクオーバーゾーン入り口のラインが10m地点です）

視覚障害(11~12)

IPC ATHLETICS

ガイドランナー:

この写真のロープのつなぎ方（腰でつなく）は、2015年までは認められていましたが、2016年のルール改正で禁止となりました。

視覚障害(11~12)

IPC ATHLETICS

ガイドランナー:

競技者に適用されるルールはガイドにも同様に適用されます。2人ともスターティングブロックを使わなくてはならず、フライングルールは、ガイドランナーにも適用されます。

視覚障害(11~12)

IPC ATHLETICS

ガイドランナー:

T11とT12のレーンを走る種目では、ガイドの有無にかかわらず2つのレーンが与えられます。レーン表示、奇数と決まっています。(例)第3レーンは、3レーンと4レーンを使用。

2つのレーンをひとつのレーンとみなしますので監察員は注意が必要です。

技術総務は、レース前にスタートラインを延長します。

視覚障害(11~12)

IPC ATHLETICS

ガイドランナー:

フィニッシュでは、競技者が先にラインを越えなくてはなりません。ガイドが先着した場合は、失格となります。マラソンでもこのルールは適用されます。監察員の任務ですが、最終確認は、写真判定画像を使いますので、写真判定員との連携が必要です。

ガイドランナーの位置は、右でも左でも構いません。ガイドが左であれば、競技者による内側レーン侵害の可能性は減りますが、走る距離は長くなります。ガイドランナーの位置を考慮し、5000m以上で給水を設置する際には、通常のレーン上(右側)だけでなく、フィールド側(左側)への配置も必要です。

視覚障害(11~12)

IPC ATHLETICS

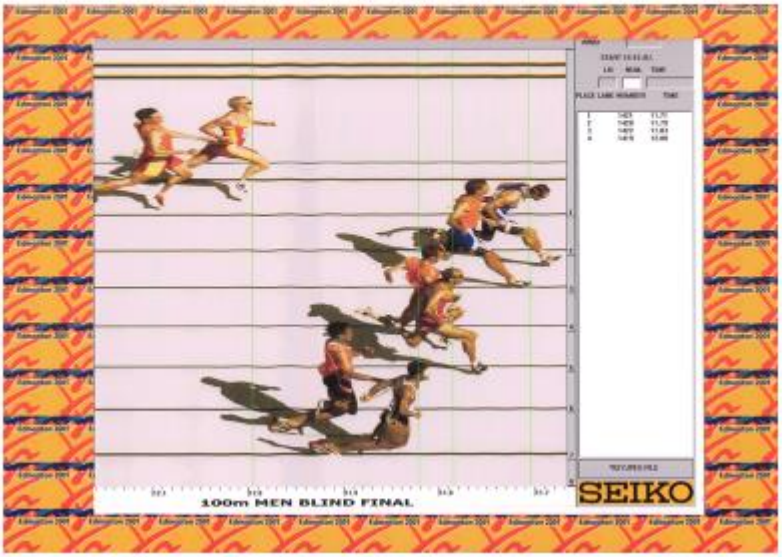
ガイドランナー:

5000m以上の種目では2人のガイドが認められます。交代はバックストレートの審判長が定めた場所でおこなわなくてはならず、交代をしなかった場合には、失格となります。

視覚障害(11~12)

IPC ATHLETICS

フィニッシュ:



視覚障害(11~12)

IPC ATHLETICS

助力:

競技者は、タイマーを見ることができず、競技役員が読みあげてもその言葉が理解できないことがあるので、同じチームのメンバーが、フィニッシュ近くのトラック外側に立って、途中計時を伝えることが認められています。審判長の許可が必要です

視覚障害(11~12)

IPC ATHLETICS

レース実施人数:

T11とT12の短距離レースで、8レーンのトラックでは、競技者の数は4名が最大です – 同数のガイドのレーンを用意する必要があるからです。中長距離種目でも最大人数はIAAF規則と異なります。

このことから、視覚障害のクラスでは、決勝進出基準は、IAAFルールと異なります 。

100m-800m　最大4名（決勝進出基準例：予選2組　1着+2）

1500m　最大6名（例：予選2組　3着＋4）

5000m/10000m　最大10名

視覚障害(11~12)

IPC ATHLETICS

リレー:

4 x 100 mリレーと4 x 400 mリレーともに、T11 – 13 の競技者でチーム編成がなされます。

4人の構成について、T11は1人以上、T13は1人のみという規則があります。

オーダー提出時、競技者係はクラス編成の確認が必要です。

T11、T12同様に2レーンが用意されます。

視覚障害(11~12)

IPC ATHLETICS

リレー:

視覚障害のリレーでは、バトンの使用は必須です。バトンは競技者とガイドのどちらが保持してもかまいません。受け渡しもどちらがおこなってもかまいません。

バトンの受け渡しはテイクオーバーゾーン内でおこなわれなくてはならず、その際、バトンの位置が重要であり、競技者/ガイドの身体の位置は問題ではありません。

ゾーンには競技者とガイドのどちらが先に入ってもかまいません。バトンを受け取ることができなかった競技者/ガイドが再度、ゾーンに戻ってバトンの受け渡しを完了することは認められています。

ガイドと走らないT12の競技者がゾーンの位置を把握できるようエスコートが助けることができます（次ページの写真参照）

視覚障害(11~12)

IPC ATHLETICS

リレー競技:

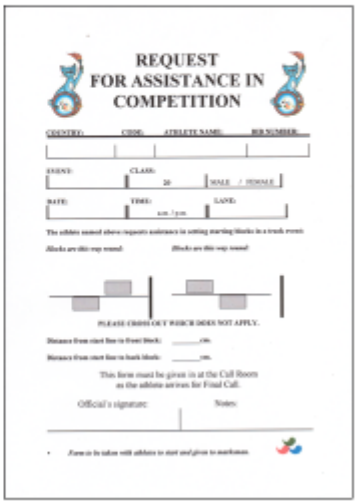
視覚障害(11~12)

IPC ATHLETICS

助力:

競技者は右のようなスターティングブロックの設置位置についての希望書式を持参することが認められており、スタート地点で出発係に対し設置を依頼することができます

主要な大会では、決められた書式が事前に用意され、招集所で配布されます



REQUEST
FOR ASSISTANCE IN
COMPETITION

COUNTRY: CODE: ATHLETE NAME: BIB NUMBER:

EVENT: CLASS: 20 MALE / FEMALE

HEAT: TIME: a.m. / p.m. LANE:

The athlete named above requests assistance in setting starting blocks in a track event.

Blocks are this way round: Blocks are this way round:

PLEASE CROSS OUT WHICH DOES NOT APPLY.

Distance from start line to front block: _____cm.

Distance from start line to back block: _____cm.

This form must be given in at the Call Room as the athlete arrives for Final Call.

Official's signature: Notes:

- Form is to be taken with athlete to start and given to marksman.

脳性麻痺(35~38)

IPC ATHLETICS

競技者のスターティングブロック使用は任意です。

スタンディングスタートでもクラウチングスタートでもかまいません。クラウチングのときでも、ブロックの使用は任意です

聴覚障害のある競技者には、旗やピストルに連動したストロボライトなどを使用した特別なスタート時のアレンジをすることが可能です。

下肢切断(42~44)

IPC ATHLETICS

スタート:

競技者のスターティングブロックを使用は任意です。

スタンディングスタートでもクラウチングでもかまいません。ブロックの使用は任意です。

義足の競技者は、クラウチングの体勢のとき、両膝とも地面につかない(つけない)こともありますが、規則違反となりません

下肢切断(42~44)

IPC ATHLETICS

レース:

競技者は走る競技では、義足を着用しなくてはなりません。

ホッピング(片足で走ること)は認められません。

競技者は両足の長さが同じになるよう義足またはシューズ付きを着装しなくてはなりません。両足義足で決められた数値以上に伸ばすことは禁止されています。(次ページ参照)

義足のサイズは、招集所で確認され、必要に応じてスタート地点でも確認されます。主にクラス分け委員が担当

下肢切断(42~44)

IPC ATHLETICS

レース:

両脚義足の競技者は両足の長さが同じになるよう義足またはシューズ付きを着装することができますが、意図的に長くしようとしてはいけません

事前に最大身長が登録され、招集所で確認をおこなうことがあります

上肢切断(45~47)

IPC ATHLETICS

助力:

競技者は右のようなスターティングブロックの設置位置についての希望書式を持参することが認められており、スタート地点で出発係に設置を依頼することができます

REQUEST
FOR ASSISTANCE IN
COMPETITION

COUNTRY: CODE: ATHLETE NAME: BIB NUMBER:

EVENT: CLASS: MALE / FEMALE

DATE: TIME: LANE:

The athlete named above requests assistance in setting starting blocks in a track event.

Blocks are this way round! Blocks are this way round!

PLEASE CROSS OUT WHICH DOES NOT APPLY.

Distance from start line to front block: ____cm.

Distance from start line to back block: ____cm.

This form must be given in at the Call Room as the athlete arrives for Final Call.

Official's signature: Notes:

Form to be taken with athletes to start and given to marksman.

主要な大会では、決められた書式が事前に用意され、招集所で配布されます

上肢切断(45~47)

スタート:

上肢切断及び腕に障害のある競技者は、スタート時に腕を支えることができるようブロックやパッドを使用することができます。

これは腕や手の一部として扱われますので、スタートラインより手前に置かれなくてはならず、他のレーンに入ってもいけません。

上肢切断(45~47)

スタート:

最近は、走る種目でも、義肢を着用することがより一般的になってきています。

腕や手と同じ扱いですから、スタート時は、スタートラインに触れてはいけません。

切断(42~44/45~47)

IPC ATHLETICS

リレー:

リレーでは、バトンは使用せず、テイクオーバーはタッチでおこなわれます。タッチはゾーン内でなされなくてはならず、身体の位置は問題ではりません。

障害の程度がもっとも軽いクラス（47）の競技者は、チームに最大2名までとなっています 。チーム編成上、これ以外の制限はありません。

例） 42　44　45　47　　OK

45　46　47　47　　OK

42　47　47　47　　NG(ダメ)

切断(42~44/45~47)

IPC ATHLETICS

風速:

IAAFルールと同じです

切断以外のすべての立位クラスや車いすを使用するクラスでも同様です

車いす(32~34/51~54)

IPC ATHLETICS

レース用車いす:

車いすは少なくとも3つの車輪がなくてはなりません。

IPC主催のパラリンピックと選手権大会では、T32を除き、小さな車輪が1つと大きな車輪2つと定められています。

それ以外のIPC公認大会では、小2つ、大2つの車いすの使用も認められます。

車いす(32~34/51~54)

IPC ATHLETICS

レース用車いす:

大きな車輪にはハンドリムがついています。

ギア使用は認められていません。

車いすは、ハンドリムを使って「前進」します。ただしT32に限り、「後ろ向きで進む」ことが認められています。

車いすの操作は自分でおこなわなくてはなりません

車いす(32~34/51~54)

IPC ATHLETICS

レース用車いす:

大きな車輪の最大直径は70cmです

小さな車輪の最大直径は50cmです

車いすの後部は車輪でなくてはなりません。車いすが規則に適合しているかを確認するために、後部を壁に付けると、車輪だけがくっついていることの確認ができます。競技者係の任務です

車いす(32~34/51~54)

IPC ATHLETICS

レース用車いす:

車いすに、空気力学的に有利になるような付属品(フードカバーなど)を装着することは認められません

取り付け軸は、前輪の車軸までのみ認められますが後輪外側に付けてはいけません(右の写真参照)

いかなる付属品も含めた高さは50cm以内です

招集所で確認がおこなわれ、スタート地点で再確認がおこなわれることもあります

車いす(32~34/51~54)

IPC ATHLETICS

スタート:

車いすは競技者の四肢として扱われるため、前輪は、スタートラインに触れてはなりません。スタートライン上またはラインより前方に位置してはなりません。（次ページ参照）

スターターと出発係は、スタート合図を進めるにあたり、競技者の腕が確実に止まっているか、しっかりと観察します。

スタート合図は、ランナーと同一です。短距離種目では “On Your Marks（オンユアマークス）, Set（セット）, 号砲” そして800m以上では “On Your Marks（オンユアマークス）, 号砲” となります。

車いす(32~34/51~54)

IPC ATHLETICS

スタート:

車いす(32~34/51~54)

IPC ATHLETICS

スタート:

フライングやスタートのやり直しがあるとき、スターターはつぎのように声をかけなくてはなりません

正 : “Wheel back”（後方に！）

誤 : “Stand up”（立って）

車いす(32~34/51~54)

IPC ATHLETICS

スタート:

もし800m以上のレースの最初の50mまでで、競技者の大部分がかかわる転倒があった場合、スターターには呼び戻しをおこない、再スタートをおこなう権限があります。
呼び戻しは、必須ではなく、スターターの判断となります。
スタート前方、50m地点に、旗を立てておくことが推奨されます

車いす(32~34/51~54)

IPC ATHLETICS

レース:

すべてのトラック種目では、競技者はヘルメットを着用しなくてはなりません。競技者係は、競技者がヘルメットを保持しているかを確認し、出発係や監察員は、着用しているかを確認しなくてはなりません。着用していなかった場合は失格となります

車いす(32~34/51~54)

IPC ATHLETICS

レース:

競技者は少しでも他の車いすに近づこうとします。このような状況下では、監察員は、前輪が先行する車いすの後部に入り込んでいるかどうかをしっかり監察しなくてはなりません。このこと自体はルール違反ではありませんが、もし転倒などが発生したときには、競技者の不注意を証明するものとして重要な事実となります

車いす(32~34/51~54)

IPC ATHLETICS

レース:

追い越しの際、競技者は最大限の注意が必要です。追い抜き後、十分な安全を確保してインに戻るのは、追い抜いた競技者の責任です。また追い抜かれているときは、外にふくらむことなくレーンを維持する責任が、追い抜かれている競技者にはあります

車いす(32~34/51~54)

IPC ATHLETICS

レース:

車いす競技者の位置は、立位に比べ低いですが、周回記録表示盤や風向風速計の高さは、通常と同じでかまいません。

競技者はランナー同様、レーンナンバーを付けなくてはなりません。通常は、ヘルメットにつけます。

800mのブレイクラインには危険防止のため、ライン上のマーカーではなく、両脇に旗を立てます。

車いす(32~34/51~54)

IPC ATHLETICS

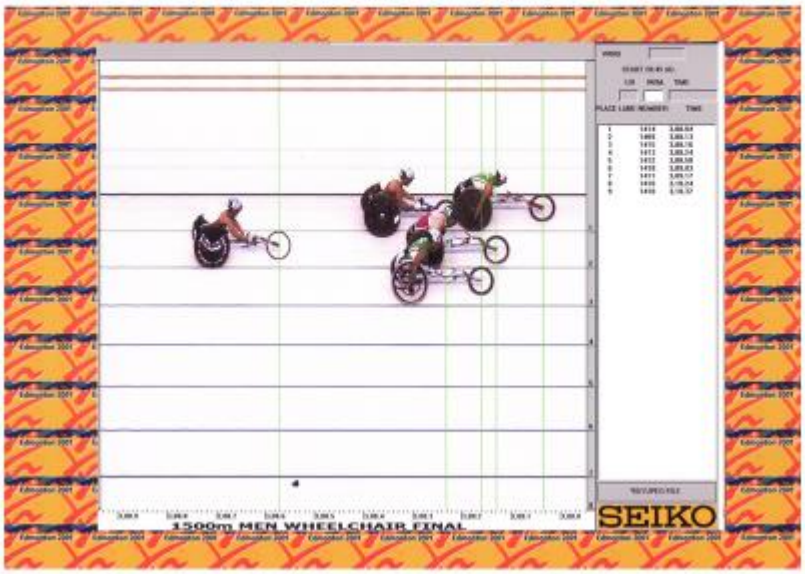
フィニッシュ:

前輪の車軸がフィニッシュラインに到着したときが、フィニッシュとなります

車いす(32~34/51~54)

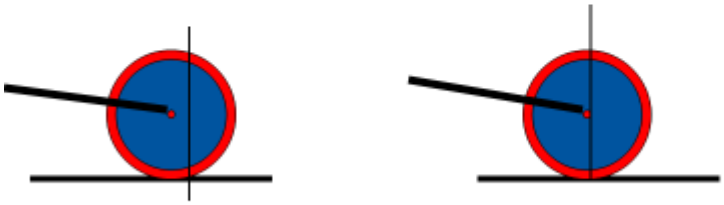
IPC ATHLETICS

フィニッシュ:



車いす(32~34/51~54)

スタート位置(左)とフィニッシュ位置(右)



車いす(32~34/51~54)

リレー:

リレーでは、バトンは使用せず、テイクオーバーはタッチでおこなわれます。タッチはゾーン内でなされなくてはならず、身体の位置は問題ではありません。
4x100mと4x400mでは各チームに2レーンが用意されます。またすべてのテイクオーバーゾーンの20m手前から助走を始めることが許されているため、ラインを引く必要があります。
T33-34のリレーでは、T33が1名以上、T51-52では、T51が1名以上、T53-54では、T53が1名以上含まれていなくてはなりません。

車いす(32~34/51~54)

IPC ATHLETICS

リレー:

引き継ぎは、ゾーン内で、体に最初にタッチすることをもって成立します。前の競技者は、つぎの競技者を押してはいけません

フィールド競技

IPC ATHLETICS

視覚障害を持つ競技者のための種目

クラス 11 は完全に視力がなく、特別なルールがあります

クラス 12 は一部視力がありますが、特別なルールが認められています

クラス 13 もまた一部視力がありますが、すべてIAAFルールを適用します

競技者によっては、複数の障害があること理解しておくことが重要です
– 例えば、聴覚障害と視覚障害の双方がある競技者もいます

こうした競技者へは特別な対応がなされます

視覚障害(11~12)

IPC ATHLETICS

アシスタント:

T11と12の競技者は、アシスタントを伴って競技場所に入ることができます

アシスタントは、サークル、投てき場所、助走路内で方角を示すことができますが、完了後は、外に出なくてはなりません

アシスタントは、競技者の試技の際、方角を示す目的で、音を使うことができます

アシスタントは、"競技が正しく終了した"あとに、競技者を連れ出すことができます。落下前に、選手と接触した場合は、サークルや砂場に入り込んだ場合は、無効試技となります

視覚障害(11~12)

IPC ATHLETICS

アシスタント:

アシスタントの数は、跳躍種目では、T11は2名まで、

T12は1名までです。投てき種目は1名です。

アシスタントは、方向指示など競技者の視覚の手助けをすることが目的であり、コーチをすることは禁止されています。

競技者とアシスタントは、離れた場所に待機させるよう推奨されています。

視覚障害(11~12)

IPC ATHLETICS

アシスタント(コーラー)の位置:

★ : OK
⊘ : NG(ダメ)

視覚障害(11~12)

IPC ATHLETICS

アシスタント(コーラー) – 制限時間:

競技者の制限時間は、1分ですが、もし試技の途中で方角など問題が生じた場合は、時計を止めることができます

コーラーによる指示が完了したなら、時計を再び動かします。リセットしてはいけません

視覚障害(11~12)

IPC ATHLETICS

アシスタント(コーラー):

視覚障害(11~12)

IPC ATHLETICS

アシスタント(コーラー):

視覚障害(11~12)

IPC ATHLETICS

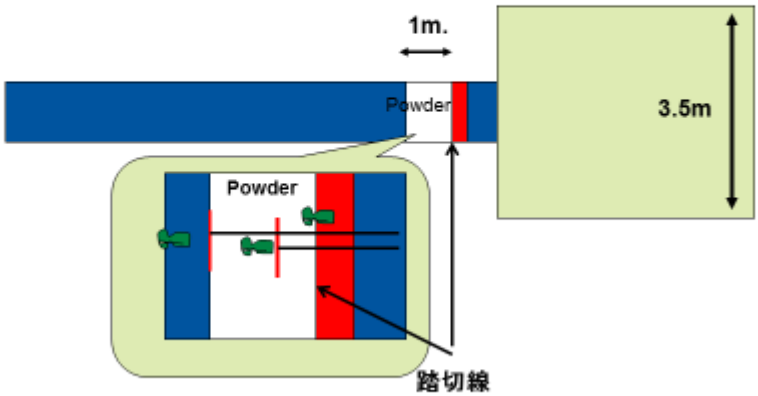
踏切エリア:

視覚障害(11~12)

IPC ATHLETICS

距離の跳躍の距離計測:

走幅跳＆三段跳



切断(42~44/45~46)

IPC ATHLETICS

義足:

競技者はフィールド競技では、義足を着用する必要はありません

ホッピング（片足跳び）が認められます

切断(42~44/45~46)

IPC ATHLETICS

義足:

もし義足が跳躍中に脱落した場合、その義足による痕跡から距離を測ります

ただし砂場の手前や砂場の外に落下した場合は、無効試技となります

助走中に脱落した場合は、制限時間内であれば、装着しなおして再度、助走をはじめることができます

座位の投てき(31~34/51~57)

IPC ATHLETICS

投てき台:

投てき台には、各辺30cm以上の台座が、水平または前方を高く取り付けられていなくてはなりません。

サイドレストや背もたれは安全性確保の目的で取り付け可能。

座る部分の高さは、座る前の状態で75cm以内。

ホールディングバーの取り付けも可能です。(詳細次ページ)

これらの検査は、招集所で行ないますが、必要に応じて、競技場所での再検査もおこないます。

座位の投てき(31~34/51~57)

IPC ATHLETICS

投てき台のホールディングバー:

投てき台には、ホールディングバー(握り棒)を取り付けることが認められています。ただし次の条件を満たしている必要があり、招集所で競技者係が確認し、さらに現地でも投てき審判員が再確認の必要があります

- 曲がったり動かない
- 真っ直ぐな形状
- 溶接されていない

写真の台は使用できません

座位の投てき(31~34/51~57)

IPC ATHLETICS

投てき台の位置:

投てき競技では、常に、サークルが使用されます

やり投でも、やり投用助走路は使用しませんので、角度線は、34.92°となります

フレームのいかなる部分もサークルの内側になくてはなりません

砲丸投では、足留材を使用する必要はありません

座位の投てき(31~34/51~57)

IPC ATHLETICS

投てき台の位置:

フレームがサークル内にあることを確認するために錘のついた糸を使う審判員もいます

座位の投てき(31~34/51~57)

IPC ATHLETICS

制限時間:

投てき台を設置のための制限時間はありません。

設置が完了後、競技者が投てき台に移動し、練習が許さる制限時間はつぎの通りです。

F32-34とF54-57 ： 4分

F31とF51-53 ： 5分

試技開始後は6連投の場合は、連続試技となるため1投目は1分、2投以降は2分となります。競技者の手に投てき器具が渡されてから制限時間の計測がはじまります

座位の投てき(31~34/51~57)

IPC ATHLETICS

試技:

競技者は、投てき台に座った後、連投となります。

試技の方法は2つから選択します。

①全員3連投した後、上位8名により、さらに3連投。ただし試技順番の変更はなし。

②全員6連投。

試技の方法は、技術代表(TD)が決定します。

座位の投てき(31~34/51~57)

IPC ATHLETICS

試技:

競技者は“サークル内に位置する”バーを握ることは認められます。

またバー以外のフレイムにも落下には落下防止の目的で触れることは認められます。

サークルの外に位置するストラップを触ることは認められません

座位の投てき(31~34/51~57)

IPC ATHLETICS

助力(すべり止め等):

競技者は、手にテープを貼ったり、グローブを着用することは認められませんが、例外としてF51～53では、投てき物を触らないホールディングバーを握るほうの手であればテープを貼ったり、グローブを着用することが認められます

松ヤニのように容易に取り除くことができない物質は滑り止めとして使用することは認められません

もし競技者がストラップを使用する際は、伸縮性のないものではなくてはなりません

座位の投てき(31~34/51~57)

IPC ATHLETICS

リフティング規則:

投てきフォームについてはすべてIAAF規則と同じです。座位の投てき独特のルールとして「リフティング規則」があります。2年前に大きな改正がなされました。

IPC規則第36条
a)両脚が膝裏から臀部後方(坐骨結節)まで座面に接触するように座らなければならない。膝上切断の競技者は、大腿部すべてが臀部臀部後方(坐骨結節)まで座面に接触していなくてはならない。
b)上記座位姿勢は、投てき動作の始めから投てきの着地点に印がつけられるまでの間ずっと維持しなければならない。大腿上部か骨盤あるいはその両方をベルトなどでしっかり固定することを推奨する。

競技は、判定の妨げとならないよう体に密着したパンツを着用しなくてはなりません。招集所と競技場所で確認されます

座位の投てき(31~34/51~57)

IPC ATHLETICS

計測(光波):

投てき台を固定し、連続試技で実施される座位の投てきでは、EDM(光波)での計測が推奨されます。

競技開始前と終了時には、光波とメジャーの数値比較チェックが必須です。

座位の投てき(31~34/51~57)

IPC ATHLETICS

有効試技の判定:

有効かの判定のためには、時として、低い位置にいる必要もあります。障害によっては、競技者は、投てき物を高く飛ばすことができないからです!

障害ある競技者だから大目にみてあげようという考えは持たないでください。赤旗をあげることを恐れてはいけません!

その他の種目(31,31,51)

IPC ATHLETICS

こん棒投:

重度の脳原性麻痺競技者、頸椎損傷競技者のための独特な種目があります

こん棒投は、F31、F32、F51競技者のための種目です。

こん棒の重量は397gと定められています。

投げ方の制限はなく、こん棒のどの部分から落下しても大丈夫です。

Paralympic.org

ありがとうございました

Photos ©: Lieven Coudenys, Getty Images,
Marcus Hartmann, IPC, Rob Prezioso